

## A I Tからの研修生を迎えて

後期課程 1年 皆川あかり

2008年度A I Tとの研究交流の一貫として、2009年3月13日から20日まで、日本での研修のため、タイから2名の学生が来日した。一人はネパール出身で、障害者研究を進めている博士後期課程の学生、**Bishnu Maya Dhungana**氏、もう一人は、ベトナム出身でベトナム移民女性を研究テーマとしている博士前期課程の学生、**Pham Thi Ha Phuong**氏である。

今回、私はタイでの研修には参加できなかったが、私自身も視覚障害者を研究テーマとしていることから、主に**Bishnu**氏の訪問先のアレンジを行い、またアテンドとして参加することになった。

日本での滞在は1週間と時間に限りはありながらも、多くの方から快く協力いただく中で、障害学や障害者政策に関する研究者との面談、国立身体障害者リハビリテーションセンターの見学や、視覚障害者スポーツであるゴールボールの強化合宿の見学、また障害者インターナショナル日本会議(D P I)やアジア・ディスアビリティ・インスティテュート(A D I)への訪問が実現した。研修生も厳しいスケジュールながら、各訪問先で精力的にインタビューや意見交換を行う中で、日本の障害者政策や障害者運動のあり方を出身国ネパールと比較しながら、研究で得られた知識を将来、ネパールの政策や現状の改善に反映させたいと力強く語っていたことが印象的であった。

私自身も、アテンドとして彼女に同行することで、自分の研究分野に関わる研究者の方々とお会いし、お話を直接伺う機会を持つことができた。そして何よりも、研究によって得られた知識を自分の生まれた国に持ち帰り、社会変革につなげようとする熱意あふれる研究姿勢にとっても刺激を受けた。

このようにA I Tとの研究交流は、研究テーマを共有する学生同士で交流する機会が与えられ、学生同士がそれぞれのフィールドの情報や意見交換を行い、刺激を受け合うことができる場でもある。私にとっても研修生との交流は、これまで対象として意識してこなかった海外のフィールドに関心が広がり、今後の研究の新たな視点をもたらしてくれ、非常に貴重な経験になったと思う。

A I TワークショップやA I Tからの研修生との交流は、自らの視野を広げ、海外の学生とのつながりを作ることができる貴重な機会なので、是非参加することをお勧めしたい。